

平安京高倉宮・曇華院跡の 発掘調査



財団法人 古代学協会

昭和54年3月

目 次

	ページ
1 はじめに	2
2 発掘調査の経過	3
3 遺 構	5
(1) イ 区	5
(2) ロ 区	14
(3) ハ 区	16
4 出土遺物	18
(1) 瓦 類	18
(2) 土 師 器	21
(3) 中国陶磁器	22
(4) 陶 器 類	25
(5) 土 師 皿	26
(6) 塩 壺	28
(7) 胞 衣 壺	29
(8) 伏見人形	30
(9) 近世陶磁器	33
5 後 記	34

1 はじめに

財団法人古代学協会平安博物館敷地内の京都市中京区高倉通姉小路下る東片町および中京区東洞院通三条上る曇華院前町760-1にかけての土地は、長く未調査のまま置かれていた。この土地は、平安博物館別館の北側に隣接する用地で、約1,500m²の面積を有し、東は高倉小路に、北は姉小路に接し、西は初音中学校敷地に接している。三条大路、東洞院大路、姉小路、高倉小路の四本の道路に囲まれた四十丈四方の一町の地は平安時代の高倉宮跡推定地に相当する。この邸宅は、特に平安時代の末期に後白河法皇の皇子で、源氏旗揚げの契機をつくった以仁王(1151~80)と、その妹で百人一首の『玉の緒よ』の歌で知られる歌人、式子内親王が住んだことで有名である。また室町時代以降、明治の初年までは、尼門跡寺院瑞雲山通玄寺曇華院が営まれた所である。平安博物館ではこの四十丈四方のうち、東洞院大路の東に接した中京郵便局用地の発掘調査を、昭和50年3月~5月、同年6月~11月、昭和51年2月~3月の3回にわたって行い、平安時代東洞院大路の側溝、中世の井戸、墓などを発見し、その報告を行っている¹⁾。このような過去の調査成果を踏まえて、平安博物館別館北側用地の調査を遂行し、平安時代高倉小路および姉小路の確認、高倉宮跡の遺構の検出、中世曇華院の各種遺構の検出を行うことを希望していたが、幸いにも昭和52年度にいたって財団法人高梨学術奨励基金



第1図 発掘調査地全景(発掘前)

より、調査に必要な経費の援助を受けることができた。

調査は平安博物館館長角田文衛が調査主体者となり、平安博物館考古学第三研究室講師飯島武次が調査担当者、同考古学第一研究室講師片岡肇ならびに同考古学第三研究室講師寺島孝一を調査員として実施した。(飯島武次)

註
1) 近畿郵政局・平安博物館『東洞院大路・曇華院跡』(京都, 昭和52年)

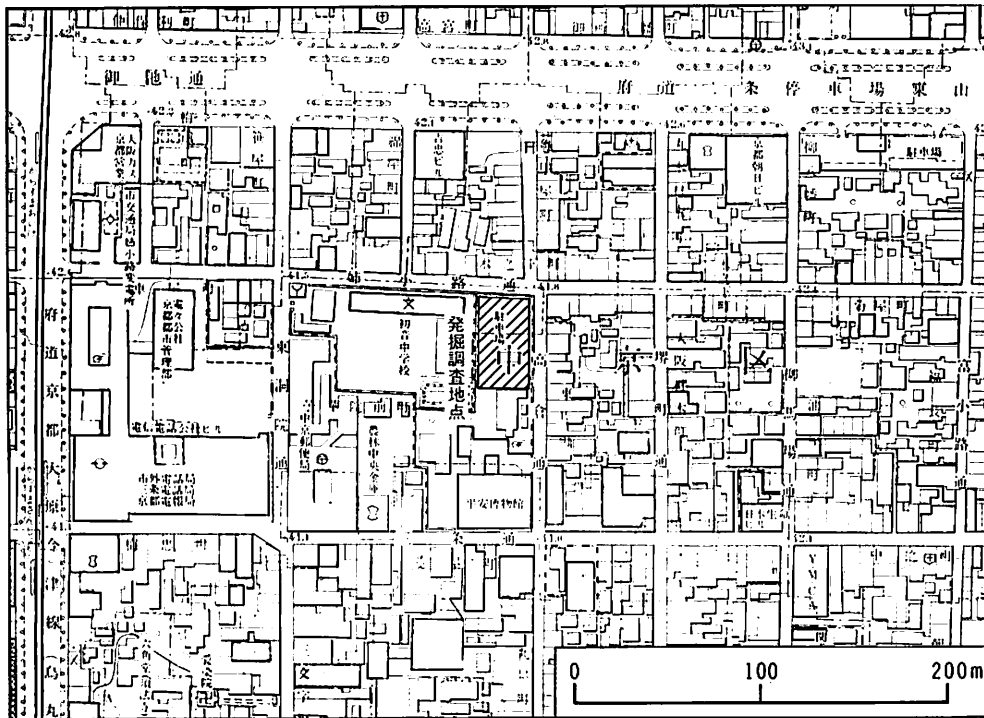
2 発掘調査の経過

調査地は平安博物館別館の北側用地で、東西約30m、南北約50mの長方形を呈す土地で、南西端に東西約10m、南北約10mの突出部分が、平安博物館別館の西側に出ている。

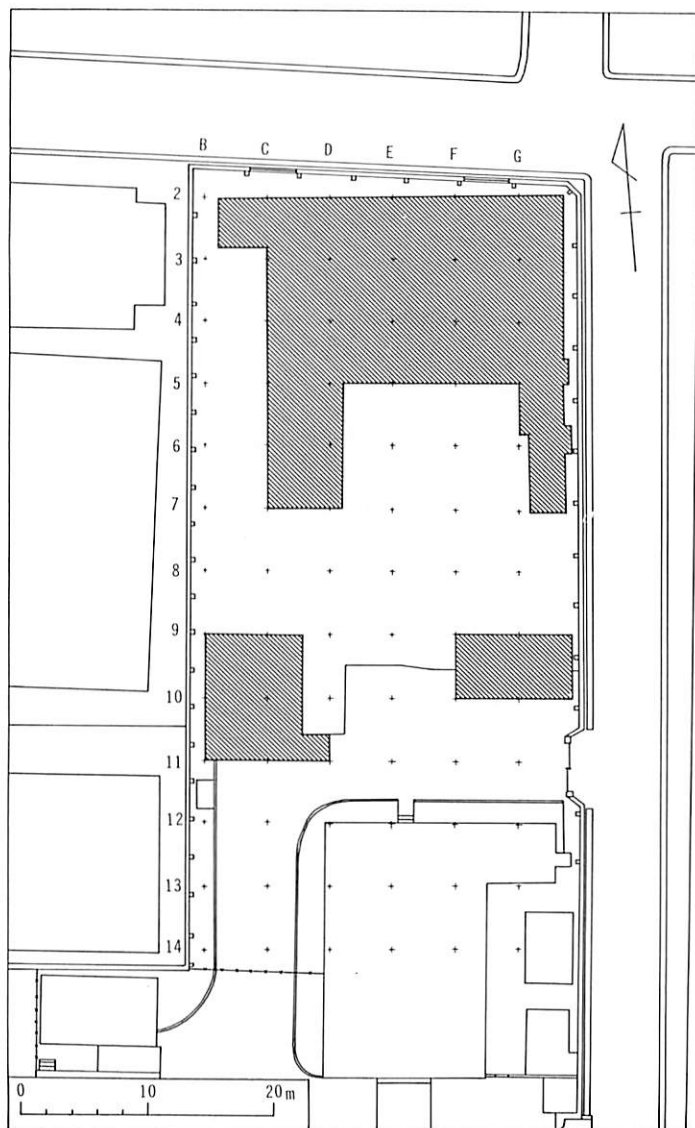
調査は昭和52年4月11日に開始し、発掘、写真撮影、遺構実測、埋戻しを行い、同年7月30日にすべての作業を終了した。

4月11～13日 調査予定地の平面測量を行う。あわせて5m方眼のグリッドを組み、東西方向をA～Hで、南北方向を1～14の記号で表すことにする。Bライン(南北)に2～14までの杭を、2ライン(東西)にBからGまでの杭を打つ。

4月14～19日 F-4, G-4グリッド内に南北5m、東西10mのトレンチを設定し、試掘を行



第2図 発掘調査地位置図



第3図 発掘調査区域図

たな探訪を掘る。

5月10～16日 調査区域の基本土層が判明したため、機械力を利用しD-2, E-2, F-2, G-2, D-3, E-3, F-3, G-3, C-4, D-4, E-4グリッド内、B-9, C-9, B-10, C-10グリッド内、F-9, G-9グリッド内の表土の撤去作業を行う。B-2, C-2, D-2, E-2, F-2, G-2, C-3, D-3, E-3, F-3, G-3, C-4, D-4, E-4, F-4, G-4の範囲を『イ区』, B-9, C-9, B-10, C-10の範囲を『ハ区』, F-9, G-9の範囲を『ロ区』と命名する。

5月17～23日 『イ区』の発掘を続行し、Ⅲ層上面まで掘り、清掃し、写真撮影を行い、その後遺構の実測を行う。

う。

4月20日～5月6日
C-2, C-3グリッド内に南北10m, 東西5mのトレンチを設定し、試掘を行い、あわせてF-4, G-4グリッドの発掘を続行する。その結果、F-4, G-4グリッドの東側において溝、石垣、土手、礫石群などを見出し、基本的な層位が表土、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層に分れることを確認する。またC-2, C-3グリッドにおいて、東西方向および南北方向にはしる石垣を発見し、F-4, G-4グリッドの場合と同じく基本的な層位が、表土、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層に分れることを確認する。その後、F-4, C-4グリッドとC-2, C-3グリッドの写真撮影を行う。

5月7～9日 B-2グリッド内に4×4mの新たな探訪を掘る。

5月24日～6月6日 『ロ区』『ハ区』の発掘を行い、IV層下の地山まで掘下げ、『ロ区』では高倉小路に平行する溝を発見する。清掃を行った後、『ロ、ハ区』域の写真撮影、実測を行う。

6月7～15日 『ハ区』の埋戻しを行う。あわせて『イ区』の西東端をそれぞれ南に向かって掘り広げる。『イ区』西側において東西幅6m、南北長さ10mに、『イ区』東側において東西幅約4m、南北長さ10mにわたって、III層上面まで掘り下げる。

6月16日～7月2日 『イ区』のIII層を発掘し、IV層上面まで掘り、『イ区』東側南端において高倉小路に平行する溝を発見する。遺構の写真撮影、実測を行う。

7月3～20日 『イ区』のIV層の発掘にかかる。地山まで発掘を行い、井戸、土壙等の遺構を発見し、写真撮影、実測を行う。

7月21～30日 『イ区』『ロ区』の埋戻しと、調査区域全域の整地を行い、高倉宮・曇華院跡の発掘調査を終了する。
(飯島武次)

3 遺 構

(1) イ 区

(I) II層 II層の遺構が存在する層位面は、II層中からIII層上面までの中間的な位置にあたる。遺構は『イ区』内の東側、中央部、西側の三つに大別され、東側には高倉小路の溝、石垣、土手、礫石群が、中央部には、切石列、建築址、西側には石垣、瓦溜、建築址が存在する。これら各々の遺構には若干の年代的な隔りがあって同一時期のものではない。また、II層中からは江戸時代から明治初年にかけての陶磁器、瓦類が多量に出土している。

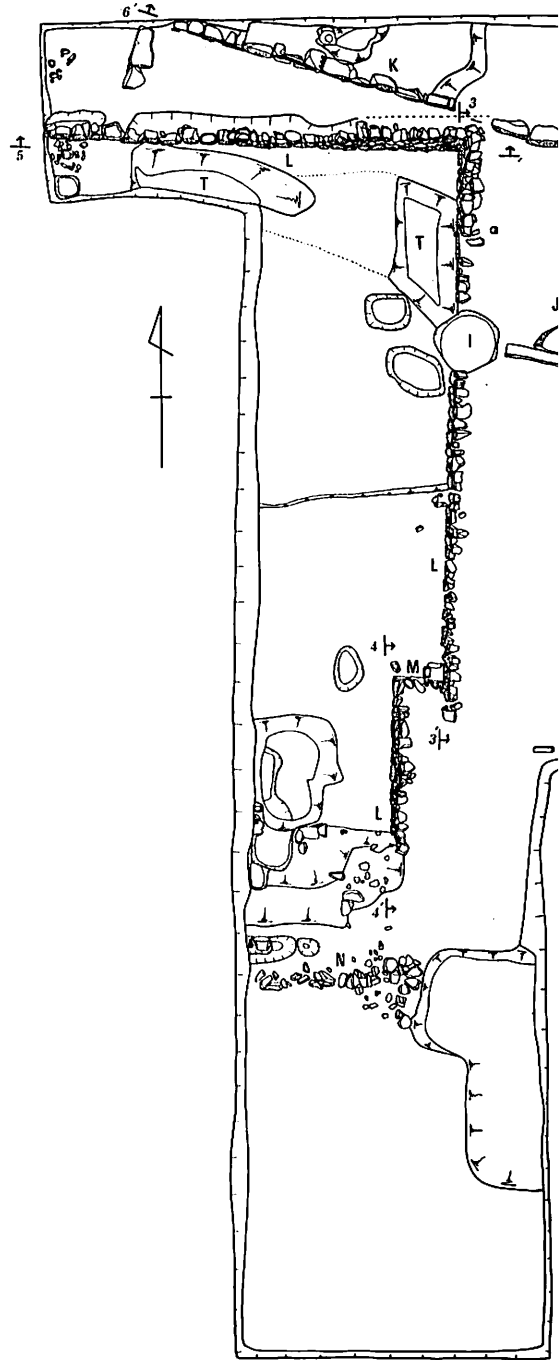
東側石垣A(第4図中A)を中心とした遺構は溝、東面する石垣、土手、礫石群からなる。溝は高倉小路の西側溝と考えられ、石垣の東側に存在するが、発掘区域内に溝の東側の肩は見出されていない。溝の底には有機物を含んだヘドロ状の黒色土が堆積している。石垣1-1'は東面する石垣で、発掘区域内の南北長は約19m、南端で東に折れて北面する石垣(2-2')となり、2-2'部分は約1.5mが発見されている。石垣Aは花崗岩(白河石)を用いて二段ないし三段に積んでいる。使用されている石には大小があり、小は20×20cmほどで、大は90×60cmほどである。積石の空間は、漆喰で充填されている。土手は底部の幅3m、上部幅1.5mで、高さは50～70cmほどである。この土手の東側が1-1'の石垣で、西側はゆるい斜面となっている。斜面上には10～20cmほどの礫が散漫に敷きつめてある。この土手と石垣は曇華院の東側築地の基礎をなすものと考えられる。この土手の土層中には近世の遺物は含まれていないので、土手の基部は中世以前に築造されたと考えられる。しかし、この土手が江戸末・明治初年の陶磁器を含むII層直下に存在し、石垣に漆喰を用いている点から考え、石垣と土手に最後の修復が加えられたのは、江戸末ないしは明治初年と考えられる。

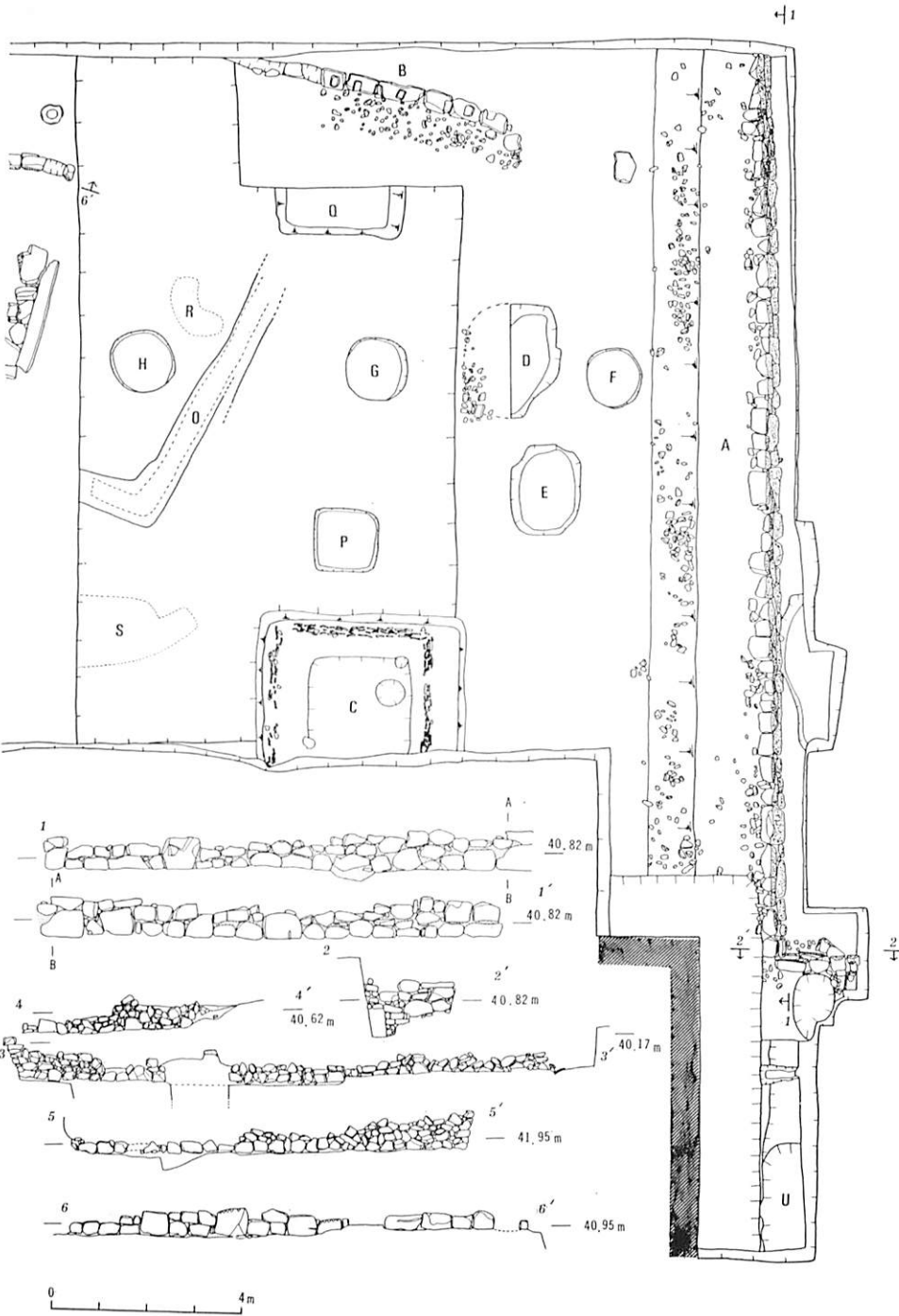
切石列B(第4図中B)は『イ区』の北側中央やや東寄りに存在する。長さ50～70cm、幅30

～40cm、厚さ15～20cmほどの7塊の花崗岩（白河石）を東と西方向にならべている。切石の花崗岩の上面には20×15cmほどの柄穴が約50cmの間隔で9カ所にわたって切込まれている。西側に配列していたであろう石は抜かれているが、その痕が溝状に残っている。この切石列がどのような建造物の一部であったかは不明であるが、柄穴の存在から考え、これらの柄穴に柱が立っていたであろうことが推定される。また、切石列がⅢ層上とⅡ層下（江戸末・明治初頭）間に存在する点から、この遺構の最後の年代は石垣Aと同じ江戸末・明治初年と考えられる。しかし、土手や石垣（A）と同一の時期に廃墟になったとの断言はできない。

建築址C（第4図中C）は、東西幅4.35m（南北長は不明）、高さ20cmほどの土壇上に存在する。土壇の縁辺に沿って近世の棧瓦が縦に土壇中に埋められている。棧瓦の内側は2～3cmの浅い窪みとなっていて、砂礫の散布が認められる。砂礫の縁辺上の南西端には直径20cmほどの礫が、北東角には直径30cmほどの礫が抜かれたと思われる窪みが存在する。この遺構が建築物の基壇の一部を形成していたことは間違いないものと思われるが、どのような建物であったかは不明である。年代については、棧瓦の使用と遺構Aと方向が一致する点から江戸末ないしは明治の初年と考えられ、曇華院に付随する建物であったと思われる。

井戸F, G, H, I（第4図中F・





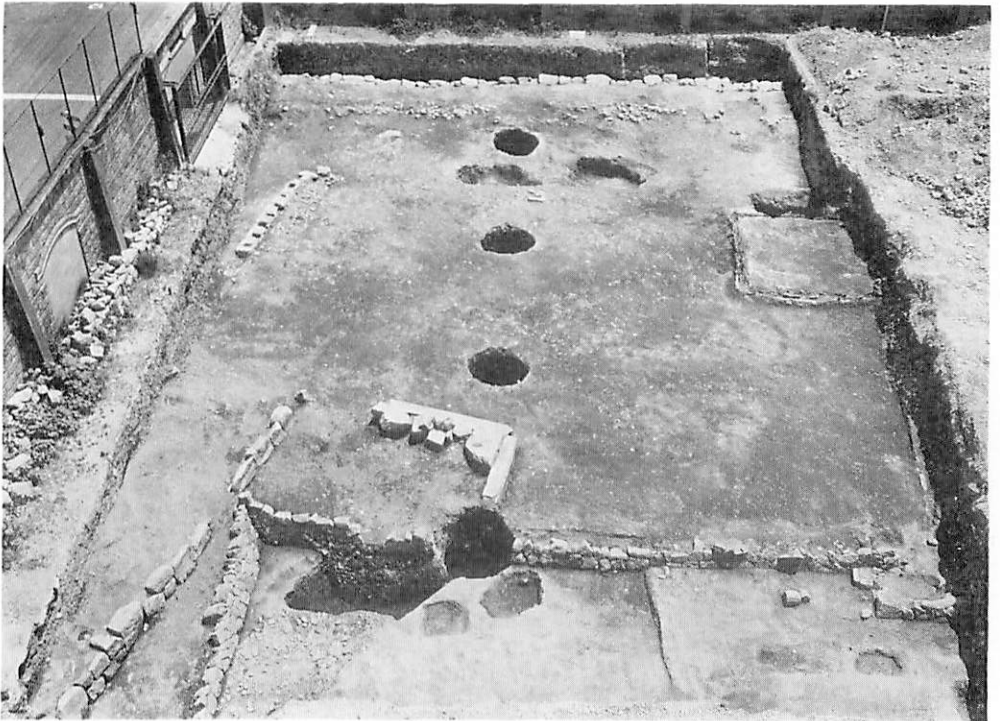
第4图 イ区発掘平面・立面尖測図

G・H・I)は井戸であるが、底と埋土中には大正・昭和初期と考えられる遺物が多量にあり、報告の対象からはずすことにする。

建築址J(第4図中J)は大形の石群と漆喰からなる。漆喰は『L』字形に石を取囲み、東の漆喰は長さ2.5cm,幅35cm,厚さ15cmほどである。また南の漆喰は長さ1.5m,幅30cm,厚さ15cmほどである。石の大きいものは $1 \times 0.6 \times 0.5$ mで、小さいものは $0.3 \times 0.2 \times 0.1$ mほどで10塊の石からなっている。建築址の南東部四分の一ほどの残骸である。漆喰の使用から考え、江戸末・明治初頭ぐらいのものと思われるが、曇華院に付随すると思われる石垣『L』にこの建築址が破壊されている点から考え、江戸末の建物の跡である可能性が強い。

瓦溜T(第4図中T)はII層の遺構であるが、層位的には石垣Lの下層に存在する。第4図では瓦溜Tは東と西に分れているが、瓦溜上層部においては同一の瓦溜であった。東側で幅3m,西側で幅1.5m,深さ1.2mほどの溝状の坑内に江戸末と考えられる棧瓦が多量につまっていた。

石垣K(第4図中K)西北から東南方向に向かって走っている。石垣は南面し、一段ないし二段に積まれている。現存する発掘区内の長さは9.4m,石垣の高さは最も高いところで90cmほどである。石材は花崗岩(白河石)で、漆喰は用いていない。石垣Kの方向は切石列B,建築址Jと平行する方位を取っている。この石垣には石垣Lによって一部が破壊されていることから、石垣Kが石垣Lより古いことは確かで、年代的には江戸末年が考えられ、曇華院に付随し



第5図 イ区発掘区全景



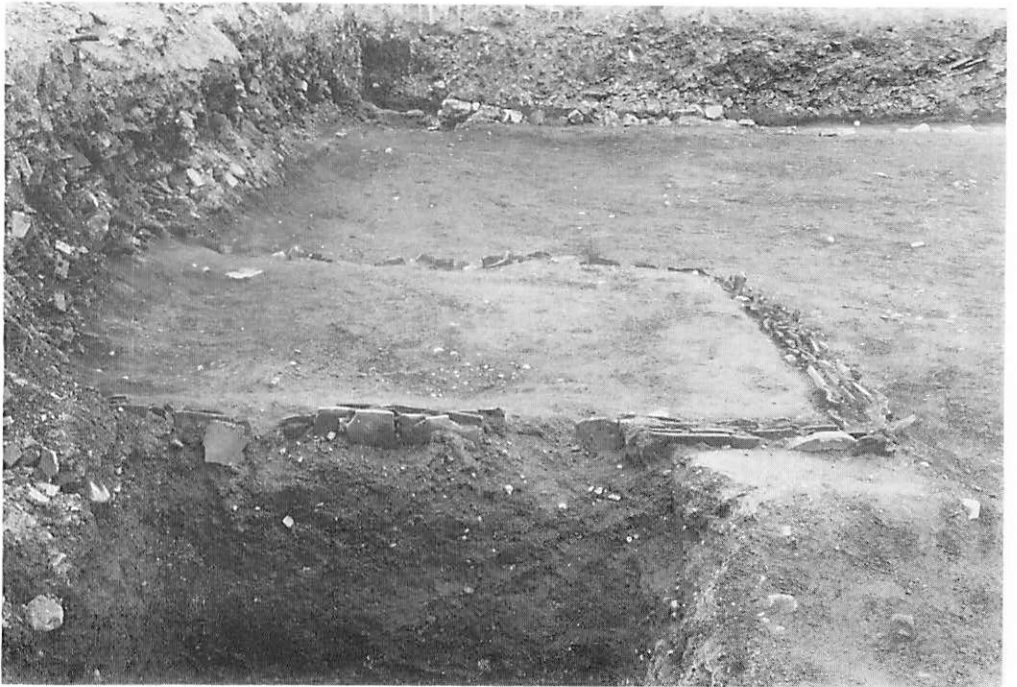
第6図 イ区西側全景



第7図 イ区東側石垣A



第8図 イ区石垣 K, L



第9図 イ区建築址 C



第10图 Ⅰ区切石列B



第11图 高倉小路溝



第12图 Ⅰ区Ⅲ層石組S



第13図 イ区Ⅲ層遺構

た施設であったと考えられる。

石垣L（第4図中L）は『イ区』の北東部から8mほど東行し（5-5'），南折して，10.5m南行し（3-3'），一旦切れて西側へ1.1m寄ってからさらに3.5m南行する（4-4'）。この石垣は直径40×20cmから10×10cmほどの花崗岩の割石を約6段80cmほどの高さに積んだものであったと推定されるが，現状ではごく残りの良い部分を除いて一段ないし三段ほどしか残っていない。石垣Lの3-3'と4-4'間が東西にずれる。この部分には北から南に登る三段ほどの階段（M）が存在したと考えられるが，遺構の残りは良くない。石垣Lは東西，南北の方位に一到し，5-5'を境として北が高く南が低く，また3-3'，4-4'を境として東が高く西が低くなっている。石垣Lの年代は，石垣K，建築址Jよりも新しく，井戸Iよりも古い。また，石垣L自体はⅢ層上に構築され，Ⅱ層（江戸時代から昭和初年）下に埋まっている。石垣Kが江戸末ないしは明治初年まで存在したと考えられる点から石垣Lの溝築は明治に入ってから可能性が強く，石垣が放棄されたのは明治年間であると考えられる。この地における曇華院は，元治元年（1864）七月十九日に兵火にかかって焼失し，その後，明治六年（1873）には朝命によって現在曇華院のある嵯峨野へ移転している¹⁹。このような状況から考えると，石垣Lは曇華院に付随するものではなく，曇華院移転後の遺構ではないかと推定される。

割石群（第4図中N）は直径40×20cmないしは10×10cmほどの割石群である。石垣L（4-4'）から西へ折れ曲がった石垣の残骸ではないかと思われるが確かではない。

（Ⅱ）Ⅲ層 『イ区』におけるⅢ層の発掘は，『イ区』の中央部において行い，Ⅳ層上面まで掘り，溝，石組，土曠を検出した。Ⅱ層中には安土・桃山時代から室町時代に遡る遺物が含ま



第14図 イ区Ⅳ層遺構

れていた。

溝O（第4図中O）はL字形に折れ曲がりⅣ層に掘込まれている。幅は60～80cmほどで、深さは約30cmである。北西から南東へ1.5mほど行き北東へ向かって直角に折れ6mほど行って終わっている。北東端の掘込みは明らかでなく、次第に溝の底が高まり周辺部と同じ高さになる。

石組R（第4図中R）は長さ1.5m、幅1mほどの範囲に直径10～20cmほどの石が散漫に散布していた。石組中には布目のある瓦なども含まれていた。石組周辺より多量の土師皿が出土している。石組S（第4図中S）は規模の大きな石組と思われるが、発掘区の関係で東側半分のみ発掘を行った。直径10～20cmの礫石を厚さ60cmほどに積み、礫石中には瓦や瓦器が含まれている。石組Sの発掘区域内の大きさは、南北1.8m、東西2.5mである。

土壙P（第4図中P）は地山に掘込まれた壙口が正方形、底が円形の壙で、壙口は一辺が1.2mで、深さは60cmほどである。この壙内からは室町時代に属すと考えられる羽釜1点と多数の土師皿が出土している。土壙D（第4図中D）はⅡ層中に掘込まれた土壙である。壙口で南北2.4m、東西約2mで、深さ80cmほどである。土壙の埋土上の西側には若干の礫石が認められる。土壙E（第4図中E）もⅢ層中に掘込まれた土壙である。大きさは壙口で、南北1.9m、東西1.5m、深さ70cmほどである。この二つの土壙D、Eの性格については不明であるが、年代に関しては埋土中に近世陶器が含まれず、埋土中の遺物が中世以前に限定される点から、中世の土壙と考えられるが、細かな年代は不明である。

（Ⅲ）Ⅳ層 Ⅳ層下は地山で、第Ⅳ層の発掘は、地山まで掘って終了している。Ⅳ層中及び地山からは井戸（Q）が発見され、鎌倉時代から平安時代と考えられる遺物が多量に含まれ



第15図 イ区IV層井戸Q

ていた。

井戸Q(第4図中Q, 第15図)は発掘区の関係で南半分しか発掘できなかった。井戸の掘込みはIV層の中間から掘られたと考えられるのが、掘込み部分はずでに削平され、当初の掘込みの肩は残っていない。現在の井戸の掘込みの肩は地山である。残存する口の南辺は2.7mで、深さ2mほどで底に至る。井戸の底には方形の木製の井戸枠が残っていた。井戸枠は方形を呈し、一辺1.15m、深さ0.9mである。井戸下底部の木枠は上下二段に分れ、中段に上下に分ける横木が存在する。木枠の南辺においては上段、下段とも5枚の板を、縦方向に並べている。この井戸

の年代を決定する遺物は出土していないが、層位的には鎌倉以前の年代が考えられ、また中京郵便局新築敷地内¹⁾において発見された平安～鎌倉の井戸に類似していることが指摘できる。

高倉小路溝(第4図中U)はI区の南東部において確認された。この溝は、石垣Aよりも古いと考えられ、高倉小路の西側に存在した溝と推定される。トレンチの壁と現在の道路の関係で、完掘はできなかったが、残存幅約1.3m、深さ50mほどの溝である。この溝は、平安・鎌倉時代に遡る可能性がある。
(飯島武次)

(2) ロ区

ロ区は高倉小路の西側溝の検出を目的として、敷地の東南隅に設定した。グリッド番号でいえばF-10、G-10にあたり、調査面積は約40m²であった(第16図)。

本区では、まず表土下約75cmで、漆喰のムロ状遺構が検出された。この施設はロ区の北方に更に続くため全貌は確認できなかった。検出した部分について言えば、上部で東西幅約3.5mの方形で、深さは60cm強であった。底に向って極端にノリをつけているため底部の東西幅は約1.4mであった。また、このムロ状遺構の東南隅には三段の階段が作られていた。全体に漆喰は15cmほどの厚さで、その下には粘土を厚く貼りつけたしっかりとしたものであった。近世末～

明治のものであろうが、その用途は不明である。

西南隅では、漆喰の施設に切られた状態で瓦積みの基壇状遺構が出土している（第19図）。瓦積みは東西方向、南北方向の2面で、東西方向のものはトレンチの南壁にそって検出されている。

南北方向の瓦積み（第19図）は、平瓦を半截したものを縦方向にならべたもので14段、ほぼ5.5cmの高さまで残存していた。東西方向のものはやや残りが悪かったが、14段でほぼ50cmの高さが検出された。これもやはり縦方向に半截した平瓦を縦に並べて積んだもので、西に向ってやや傾斜している。

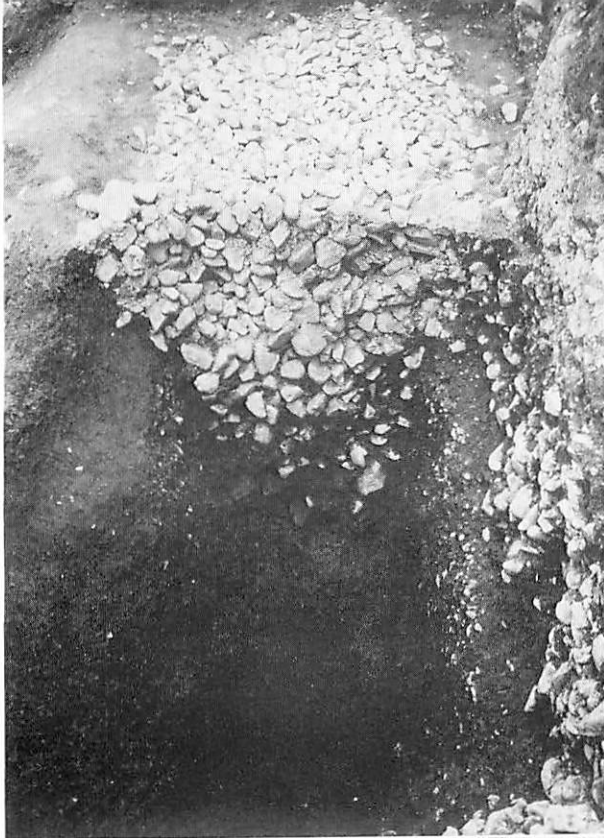
ところで、この2つの瓦積み遺構はほぼ直交しており、作りなどからみても互いに関連したものであることは明らかだが、建物の基壇のようなものではないと考えられる。それは、基壇であれば直交する瓦積みが外側で面をそろえているべきであるのに反して、検出された遺構は内側で面をそろえているためである。位置的にみても、高倉小路にきわめて近く、建物の基礎とは考えにくいのである。

遺構の諸要素から考えるに、あるいは池などの遺構の一部かもしれないが確証は無い。この遺構を埋めていた埋土の底のほうから伏見人形や近世陶磁器などが出土しており、時期は近世のものである。

さて、本トレンチで最も注目されるものは、現在の高倉通に平行して検出された溝である（第17図）。まず、表土から約1m掘り下げたところで、トレンチの東壁に沿って幅約1.5mの、南北に長い集石がトレンチ幅いっぱいに出された。集石は高倉通に面するブロック壁に近いので、危険を防ぐ意味から南側半分の



第16図 □区 全景



上より 第17図 高倉小路西溝および礫群
 第18図 高倉小路西溝底部遺物出土状況
 第19図 H区瓦積遺構

みを掘り下げた。この結果、高倉小路の側溝と推定される溝が検出された。

溝は中ほどでやや段をつけたU字形で、深さは集石の表面から約1.4m、底部の幅は約50cmであった。礫は溝の底ちかくまでぎっしりとつめこまれ、底近くの15~20cmほどが小石をわずかに含む砂層であった。この砂層には平安期の高杯などの遺物が認められた(第18図)。なお、底部には小石がやや顕著であった。

さて、この溝は位置や方向からみて、I区の南東隅張り出し部に検出された溝に続いてゆくものと推定される。ただし、溝の深さが極端に異なることと、礫がつめ込まれていることの2点で、I区の溝と大きく異っている。本来であれば、両区の間を調査すべきであったが、すでに述べたように、高倉通に面するブロック壁に接していて危険なため、今回はその部分の調査を断念した。なお、礫の中には遺物の混入が少なかつたが、わずかに検出された土師皿などからみて、礫がつめ込まれたのは中世をさかのぼらないと推定された。(寺島孝一)

(3) H区

今回の発掘区域は、高倉宮及び曇華院の北東隅の一画に相当する。出来る限り中心部の遺溝を検出するために、全域の中央により近いB-9, B-10, C-9, C-10の4グリッドを調査することとし、これをH区とした。しかしながら、C-9グリッドの東半からC-10グリッドの北東隅にかけては、表土直下に強固なコンクリート浄化槽があったので、実際の発掘面積は約85㎡であった。

コンクリート塊を含む表土など、深さ約60cmまでユンボによって除去し、以下を手掘りによ

って掘り進めた。比較的浅い個所に幾つかの極めて新しい時期のピットが認められたが、他には地山直上まで特に遺構は検出されなかった。地表下2 m前後で地山の砂礫層に達した八区の東半では、これを掘り込んでほぼ南北に走る幅約1.4mの溝状の遺構が検出された。深さは北端で5～10cm、南端で約30cm程度の浅いもので、この中からは江戸時代後期と思われる陶磁器片が若干出土したに過ぎない。これに対して西半は一段深く、約3 mで地山に達する。この区の全域を含まかなり広範囲にわたって大きく掘り込まれ、攪乱を受けているものようで、地表下60cm前後から最下部まで、おびただしい量の遺物が混然とした状態で出土した。遺物には、種々雑多な陶磁器片や瓦片、伏見人形などのほかに、珍しいものとしては鹿角製のかんざし簪と根付けがある。また、量的には少ないが獣骨・魚骨・貝殻等の自然遺物も認められた。时期的には大半が幕末から明治にかけてのもので、塵芥の捨て場のようなものであったと考えられる。

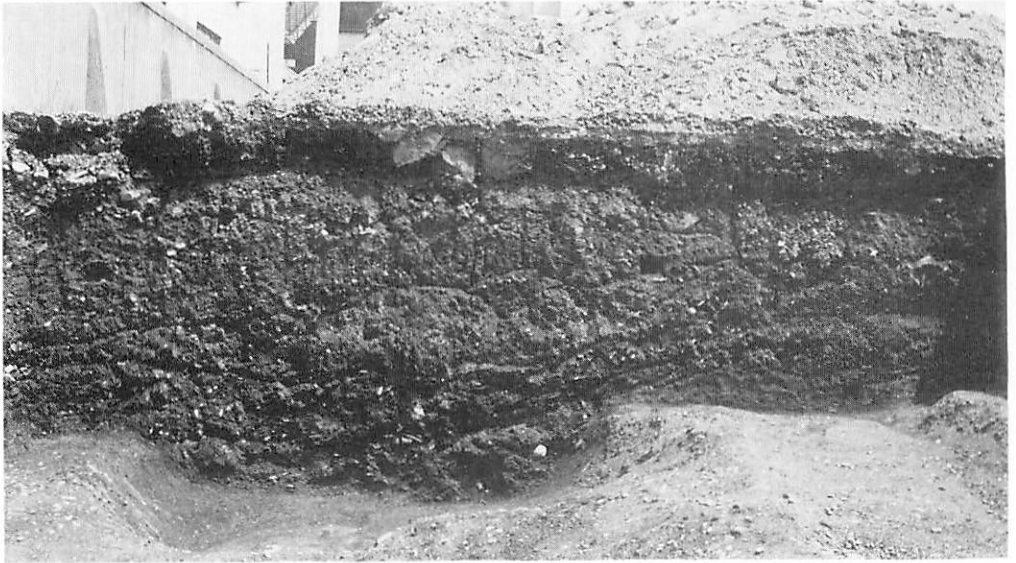
(片岡 肇)

註

- 1) 近畿郵政局・平安博物館『東洞院大路・曇華院跡』(京都, 昭和52年)



第20図 ハ 区 全 景



第21図 ハ区北壁土層

4 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物としては、瓦・土器類・伏見人形など様々なものがある。量的には、イ～ハ区に涉って、土器・瓦ともに近世のものが圧倒的に多いが、イ区の第3層、第4層中からは中世およびそれ以前のものが、比較的まとまって出土している。

(1) 瓦類

平安時代前期から明治時代までの瓦が出土している。このうち江戸時代末、元治元年の火災による瓦溜が、調査地の多くの部分を被っていた。出土した瓦は、この元治元年の焼土層からのものをはじめとして、近世のものが圧倒的に多く、中世のものがこれに続く。これらの瓦は現在整理中で、ここでは主として平安時代の瓦をとりあげて紹介してみたい。いずれもイ区の第3・4層から出土しているもので、平安時代の遺構などに直接結びつくものではない。

(I) 軒丸瓦(第22図1～7)平安時代の瓦の出土はもともと少なく、またその中でも後期に属するものが多くなっている。

1は複弁8葉の蓮花文で、このうち4葉は覗き花卉風に作られる。花卉と、突出した中序の間には蕊を作っている。焼成は硬く灰白色である。

2は『栗』銘のある幡枝の複弁8葉蓮花文が退化したような花卉を持つ。笥の押しつけはきわめて浅く、特に瓦当面下部では凹凸がほとんど認められない。周縁幅は左右が広がっている。灰白色でやや硬質である。

3は複弁8葉蓮花文で、珠文は16個と推定される。中房は突出しているが、表面が欠けてい



第22图 出土軒丸・軒平瓦拓影

るために、蓮子などの様子は不明である。表面は黒色で、やや硬質である。なお、1～3はいずれも接合式の軒丸瓦である。

4は右巻きの三つ巴文で、頭部は瓦に接している。外区には21の珠文が作られている。周縁は左右の幅が広く、また外周には斜方向の縄目痕がほぼ全周にわたって認められる。灰色で硬質である。

5も右巻きの三つ巴文で、罫線は作られるが珠文が無い。罫の押し込みが浅く、文様は平面的な感をいだかせる。周縁は左右が広い。裏面の下部は、斜めにヘラ削りを行っている。焼成は硬質で、淡褐色を呈している。

6は尾が長く延びた左巻きの三つ巴文で、頭部は互いに接しない。文様の表出は深く、また外縁も高くなっている。焼成は硬く、表面は黒色を呈している。

7は中世のものと思われる左巻きの三つ巴文で、尾は互いに接して界線となっている。その外側には珠文が作られている。また外縁の高さは約1cmであった。表面は黒灰色で硬質である。

(II) 軒平瓦(第22図8～25) これも軒丸瓦と同じく、平安時代についてみれば後期に属するものが圧倒的に多くなっている。

8は西寺跡で出土するものとよく似たモチーフの文様を持つ。この瓦は、三条西殿跡、六角堂など、この付近の寺院・邸宅での出土例が多いようである。焼成は硬く、表面は黒灰色を呈している。

9は中心に『小乃』字を縦に配する瓦である。内裏跡をはじめとして、平安宮における出土例が比較的多くみられる。焼成はやや硬質で、表面は灰色を呈している。

10は中心飾が逆梯形の中に幾何学的な線を複雑に作っている。唐草は退化して、波状のものになっている。内裏跡での出土例が多い。色調は淡褐色で、焼成はやや硬質である。

11は小片で詳細は不明であるが、退化した唐草が稚拙に表現されている。硬質で、淡灰色を呈している。

12は文様面が多く剥落していて、全体の文様をうかがうことはできないが、木の葉状になった唐草の一部を認めることができる。焼成はやや硬質で淡灰色を呈している。

13は両端から中心に向かって流れる均正唐草文で、外区は二重の界線の中に珠文を配している。ただし、本例を含めてこの罫を持つ瓦は、ヘラ削り整形のため外側の界線は残っていない。左端も一部本来の文様を欠いている。やや硬質で表面は黒色を呈している。

14は小片であるが、左端から右に向かって流れる偏行唐草文と考えられる。文様の表出は浅く不鮮明である。やや硬質で表面は黒灰色を呈している。

15は変形した唐草が、左端から中央に向っている。側面、顎はヘラ削りで粗く整形している。焼成は硬く、淡褐色を呈している。

16はワラビ手風の唐草を配したもので、平瓦部凸面から顎にかけての部分に『+』字形のヘラ記号がある。焼成は硬質で、表面は淡褐色～白色を呈している。

17は線の細い唐草文で、まわりには界線を作っている。文様の表出は不鮮明である。無顎

で、側面から下面にかけてはへら削によって丸味を持たせている。やや硬質で灰白色を呈している。

18・19は剣頭文で、いわゆる折り曲げ技法によって作られたものである。瓦当面には布目痕、顎のくびれ部には折り曲げの際のシワが認められる。焼成は硬質で、黒灰色を呈する。

20・21はいずれも剣巴文であるが、大きさには相当の差がある。20は剣頭文と三つ巴文が交互に配されると推定される。瓦当面に布目痕は認められないが、顎のクビレ部には顕著なシワがみられる。21は2～3個の剣頭文ごとに巴を配しているものと想定される。平瓦部および瓦当とも1.5cmほどの厚さのものである。

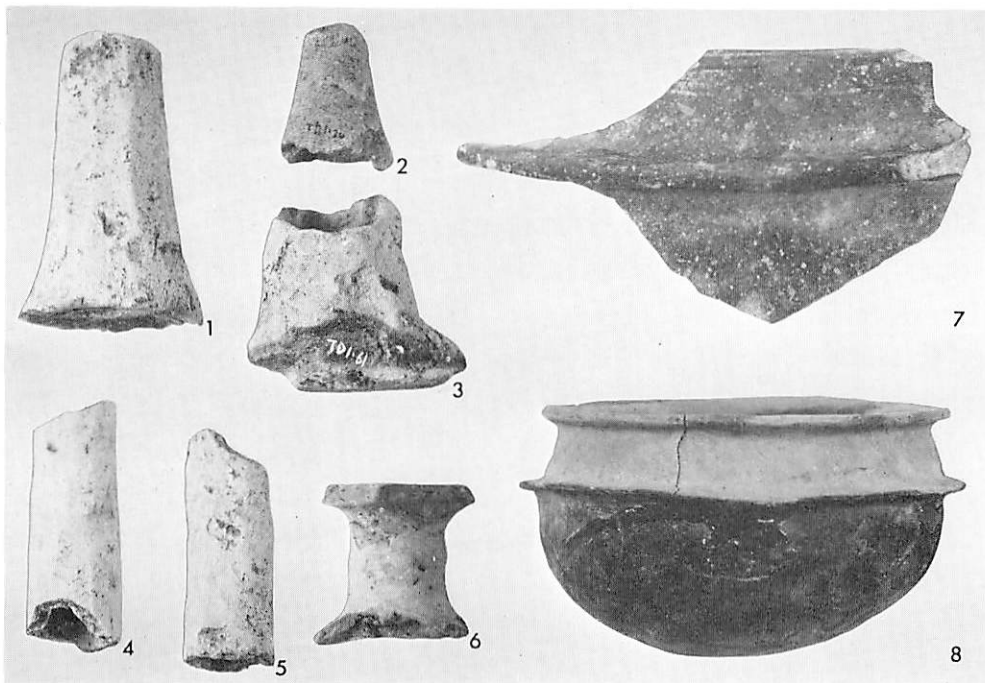
22～24は巴と雁金の文様を持つもので、栢の森の八角円堂跡や、尊勝寺跡などに類例がみられる。いずれも硬質で灰色を呈している。(寺島孝一)

(2) 土師器

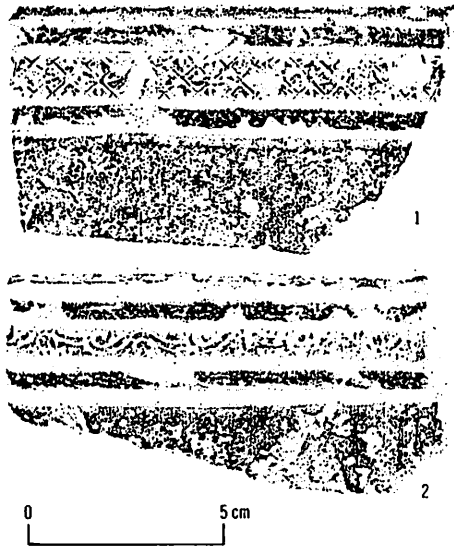
今回の発掘調査で出土した平安時代から中世にわたる遺物のうち、この項では土師皿および陶磁器類を除いた土器等を紹介する。

高杯は第23図1～6のように、8面ほどの比較的面とりの数の少ないものから、20面近くと面取りを施したもので、また断面が円形をなすものなど種々のものがみられた。しかし、いずれも復元可能なものは無かった。7・8などの羽釜類や土鍋も比較的多く出土している。

第25図1は径8cmほどの小形の羽釜でイ区南部土器ピットから出土している。この土器の外



第23図 土 師 器 類

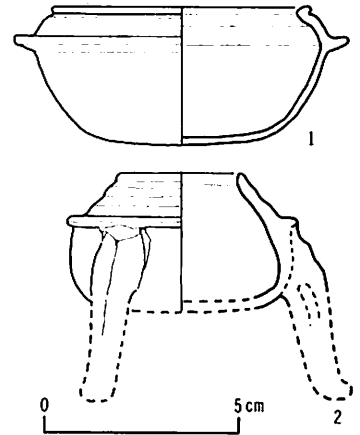


第24図 手焙りの文様例

面中央に11弁の花文を持つものが出土している。土器ではないが、滑石製の石鍋の破片もかなり出土している。いずれの破片も程度の差こそあれ、割れた面を研磨している。また、鉢と思われる土器の内部底面に、滑石をこすった痕が顕著に残っているものが1点出土している。第24図のような手焙りの出土も少ない。

面は、ススの付着が顕著で、単なる模型では無いことが知られる。同一地点からもう1点同じものが出土しているが、これには外面にススの付着は見られない。2も土器ピットから出土したもので、三足の土器になると推定される。内外面とも黒色を呈している。

瓦器等も数は少ないが出土している。概して断面三角形の高台を付けるが、高台が無いものの中に、内



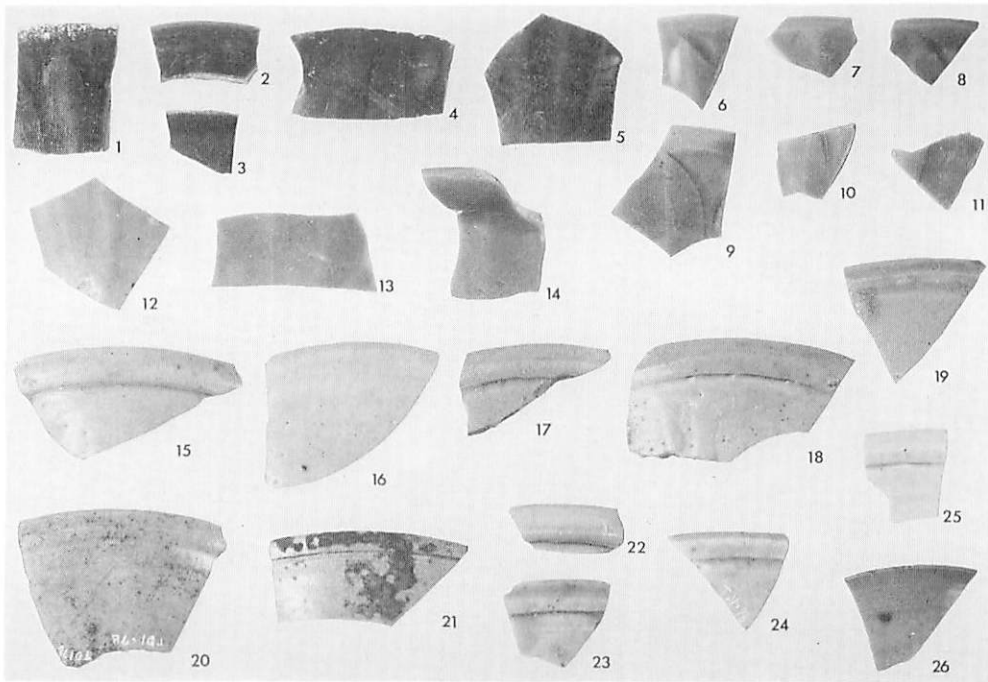
第25図 ミニチュア土器

(寺島孝一)

(3) 中国陶磁器

今回調査を行った発掘区域のⅢ層・Ⅳ層からは、中国からの輸入品と考えられる青磁、白磁、白青磁の破片が多量に出土している。大まかには10世紀から15世紀に至る間の遺物が含まれていると思われるが、その中から代表的な遺物を紹介する。

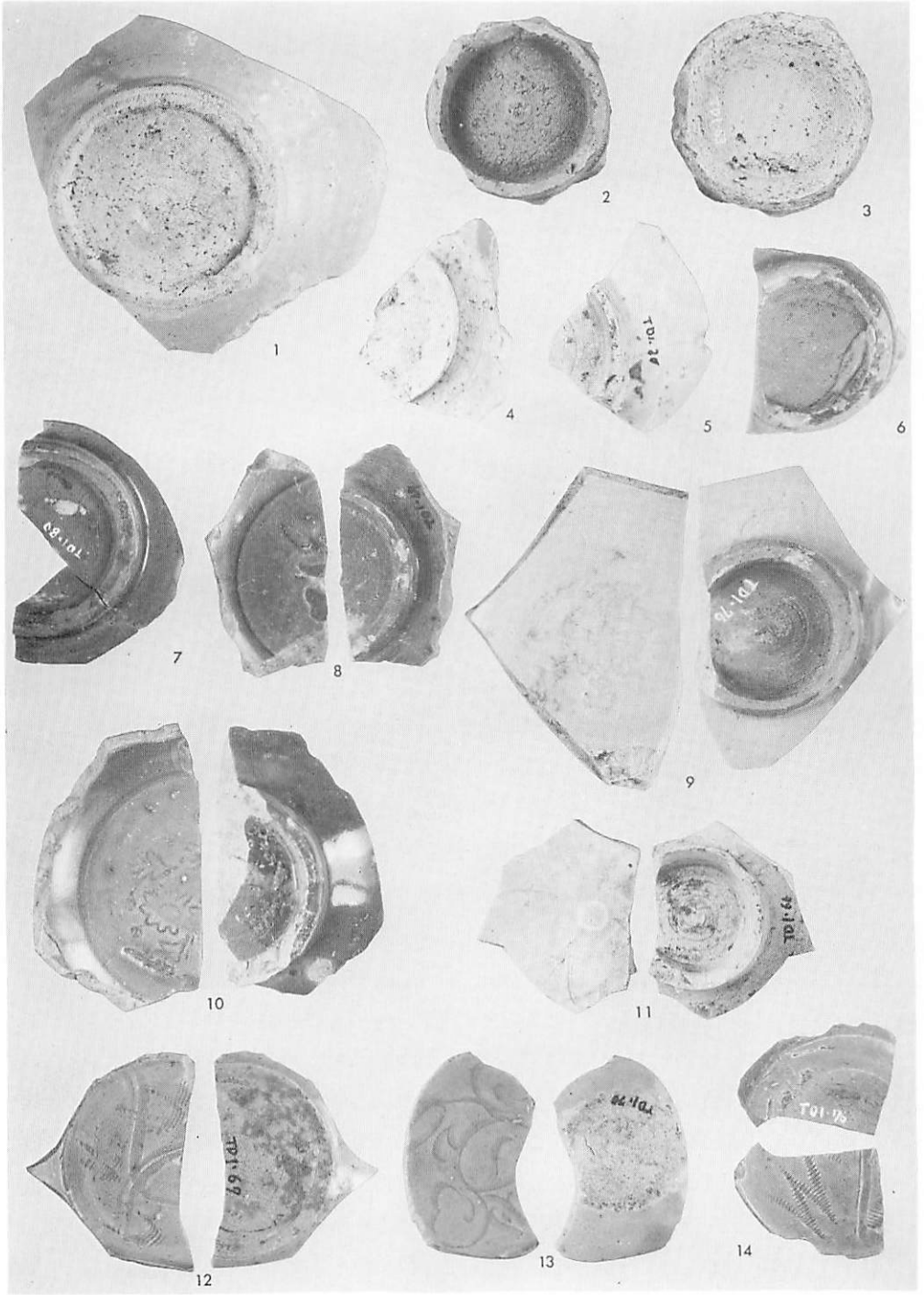
第26図1～5は江南の竜泉窯系の窯で焼かれたと思われる青磁で、釉はウグイス色を呈し、1, 3の口唇部の釉は白色がかり、また1, 4, 5は蓮弁のある碗の破片である。6～13も竜泉窯系と思われる青磁の破片で、釉は青色を呈し、いずれも蓮弁が見られる。14も同じく竜泉窯系の青磁であるが、瓶の口唇部と思われる。これらの青磁の年代は13世紀以後、南宋後半のものと思われる。15～25は灰白磁で口唇部は帯状に厚くなり、いずれも碗ないし鉢の破片と思われる。これらの灰白磁は江南の民窯の12～15世紀のものが主体と考えられる。26は口剥の碗の口縁部である。福建省内の窯で焼かれたものに類似品がある。第27図1～5は灰白磁の底部である。5は胎土の良質な磁器で釉も透明度が高い。6から10までは、青磁の底部である。いずれも釉は若干黄色味をおび、華南方面の窯で焼かれたものに類似品がある。年代的には14・15世紀頃に生産された可能性が考えられる。8は胎土が厚く、表面の花紋の彫込みは深い。9も表に花紋が見られるが、姿は明らかでない。10も表面に花紋があり、花、蕾、葉が沈線で表



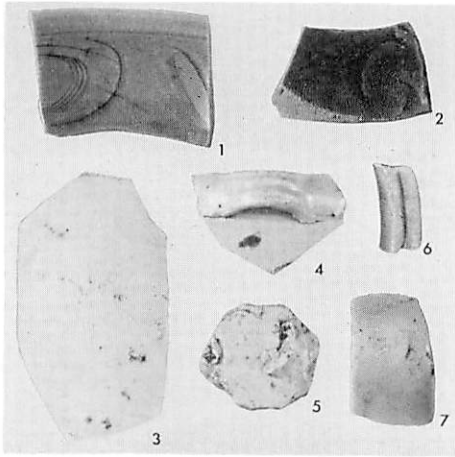
第26図 中国陶磁器類

現されている。11は青白磁の底部で、高台の断面は高く、三角形を呈し、表面には4弁の花紋が見られる。花卉は2本ないし3本一組の沈線によって表現されている。12, 13, 14はいずれも青磁の杯, 又は皿の底部である。12, 14はいわゆる珠光青磁で、ヘラ描と櫛描紋のある皿で、福建省同安県付近の窯で焼かれたものと思われる。この種の皿は近年各地から出土しているが、門田2号墳の中世墓から出土した青磁皿にほぼ同一のものがある¹⁾。また、下関市秋根遺跡においてもこの種の皿が多量に出土し、中国から日本へこの種の青磁がきわめて多く輸出されていたことが知られる。『秋根遺跡』の報告書の『歴史時代土器編年表』によれば、この種の青磁皿は13世紀後半のものとされている²⁾。13にはきわめて雑な片切彫の花紋が施されている。第28図の1, 2は緑黄色をおびた青磁で、竜泉窯系のもと思われる。3は青白磁渦紋瓶の破片で、この遺跡におけるこの種の破片は、これ1点のみであった。愛媛県松山市松山城出土と伝えられる青白磁渦文瓶は13世紀のもと言われているが³⁾、3もこれに近いものと考えられる。4, 5は白磁の四耳壺の耳および取り付け部分の破片である。6, 7は白磁の水注の把手で、7はやや青味をおびている。11~13世紀前後の水注の類にこのような幅広の把手を持つものが多い。以上の他に第II層からは明、清の染付と思われる皿, 碗の破片が若干出土している。また『大明成化年製』『成化年製』『万曆年製』の年号銘をもつ底部が発見され、これらの年号銘は染付にしばしば見られるが、今回出土したものは、大部分が伊万里系の磁器に属すものと考えられ、中国製のものはすくないと思われる。

(飯島武次)



第27图 中国陶磁器類



第28図 中国陶磁器類

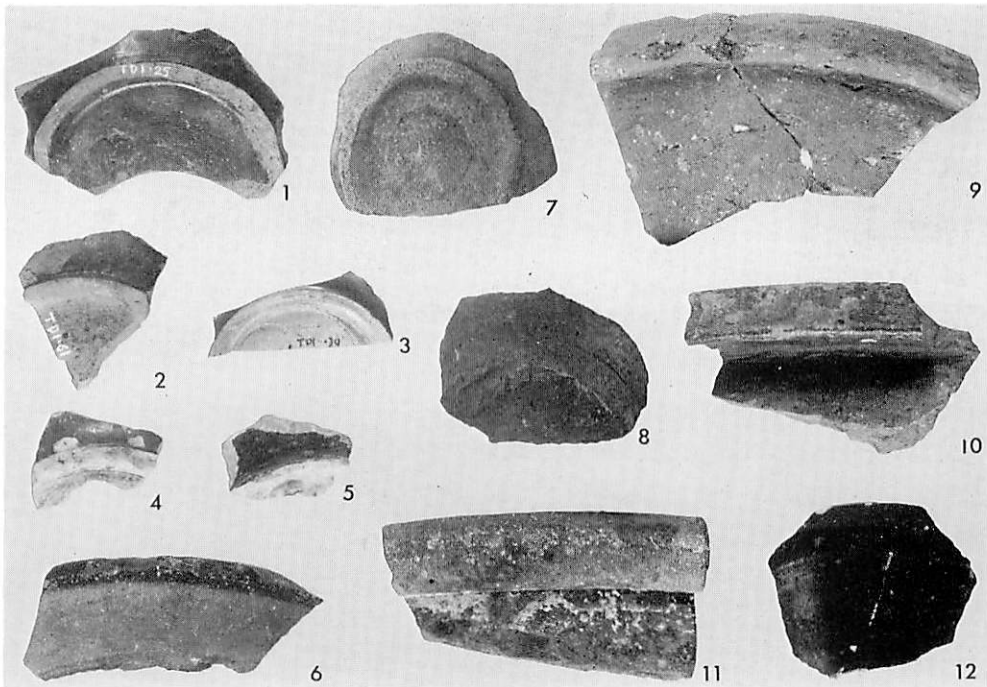
註

- 1) 甲元真之, 松井忠春『門田2号墳の調査・中世墓出土遺物』(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第1集, 福岡県, 昭和51年)
- 2) 下関市教育委員会『秋根遺跡』(下関, 昭和52年, 甲元真之氏, 岡内三真氏, 山内紀嗣氏らによる)
- 3) 亀井明德, 崔淳雨, 矢部良明『宋代の輸出陶器』(『世界陶器全集』12, 宋, 東京, 昭和52年)

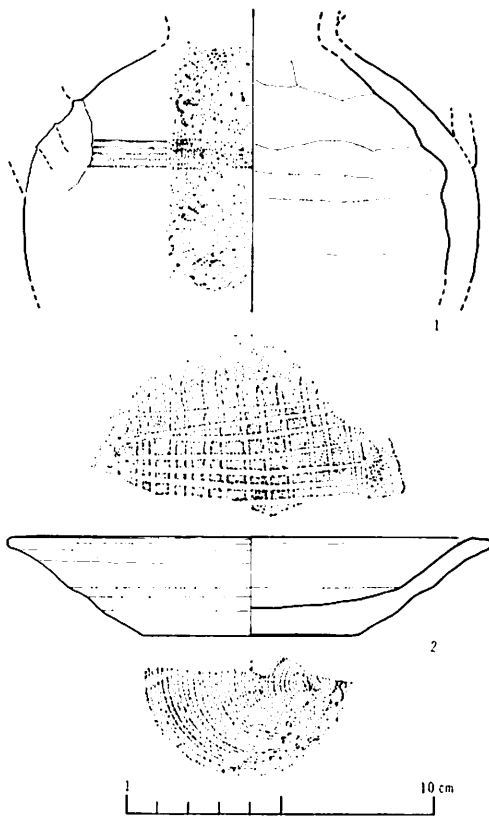
(4) 陶器類

緑釉土器は糸切り底に、断面3角形の高台を持つ12世紀のものが大半をしめるが、11世紀にさかのぼるものもわずかに認められる(第29図1～7)。器形はいずれも碗または皿であるが、1点だけ花瓶になると思われる緑釉陶器の小片が出土している。

灰釉陶器も、碗・皿などの小片が少数であるがみられる。



第29図 陶器類



第30図 瀬戸水差・おろし皿

第31図1～4は全くの手づくねによるものである。径は4.3～5cm程度で、焼成はいずれも良好である。表面に雲母片の目立つものもある。5は回転によって整形しており、底部には糸切りの痕跡が残っている。径は5.3cmである。6は平面的な底部から急に立ち上って口縁で内側にまき込むもので、直径は約5cmであった。この器形を持つものには大形のもの(8・9)もあり、この直径は10cm強である。

11～14のタイプは比較的多く出土している。いずれも成形はやや雑である。底部から口端までは1cm程であるが、その部分是指ナデによって外面全周を整形している。17は比較的狭い底部からゆるやかに立ち上って、口縁部でやや外反している。直径は12.5cm。19は今回出土したうち最も大きなタイプで直径は15.3cmであった。

第32図6は底部からやや急に立ち上がり、口縁部でやや内反する。器壁は丁寧にナデ調整している。径は12cmであった。7は土師皿の中ではきわめて丁寧な作りのもので成形後きれいにナデ調整を行っている。特に口縁部外面の横ナデ痕が目立つ。11～14はいわゆるへソ皿で、このタイプの出土も比較的多かった。(寺島孝一)

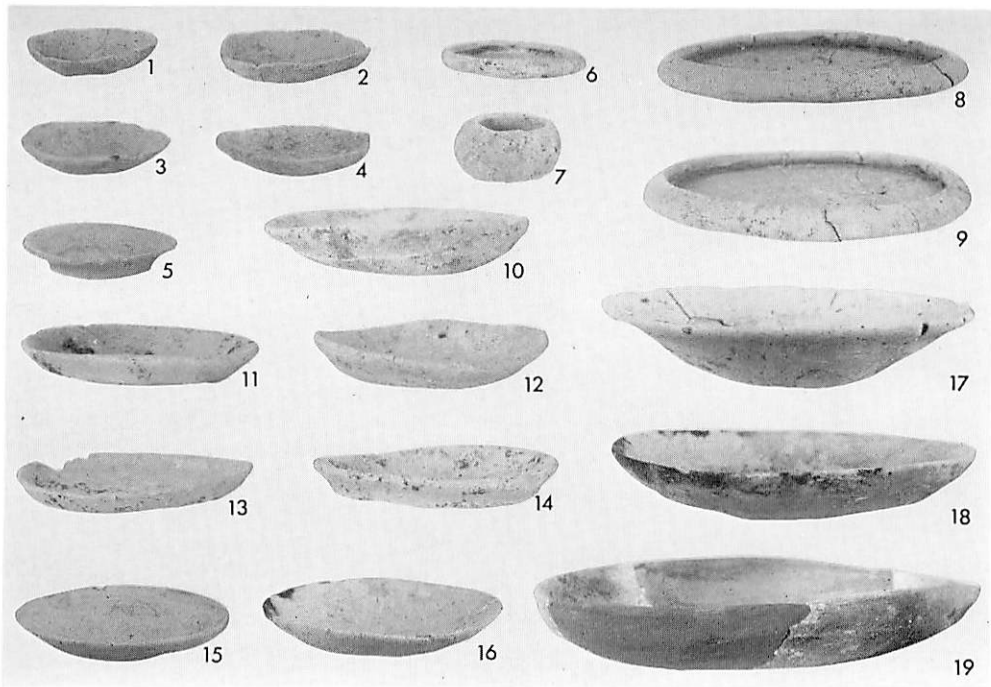
中世の陶器としては瀬戸・常滑をはじめとして、備前・信楽など各産地から搬入されたものが多くみられる。器形としては、大甕壺・插鉢・片口など日常雑器に属するものが多い(第29図8～11)が、天目茶碗(第29図12)などの破片もみられる。また、瀬戸のおろし皿(第30図2)も比較的多い。

第30図1は瀬戸の鉄釉印花文水差である。かなり強引に復元したが、肩に5本の条線を入れ、その上方に6個の菊花文、下部にも同じスタンプを押したものである。

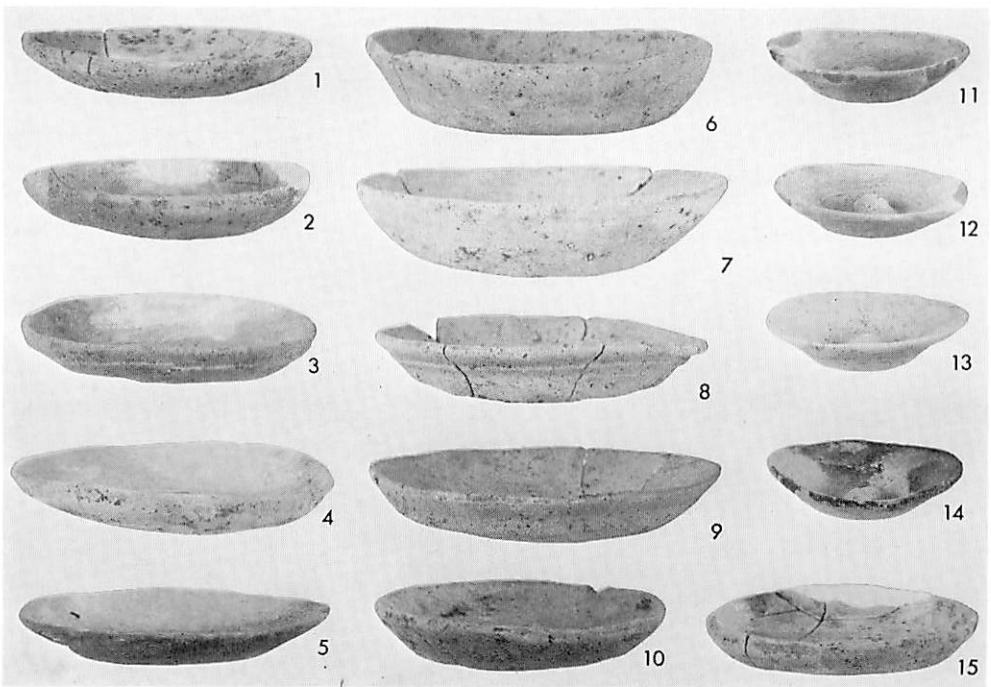
いずれもイ区中央の第3層～第4層で出土したもので、小片が多く、復元できるものは少なかった。(寺島孝一)

(5) 土師皿

やはりイ区中央第3層・第4層の出土が多いが、特に南部土器ピットでまとまって出土している。



第31図 土 師 皿 (1)



第32図 土 師 皿 (2)



第33図 塩 壺

(6) 塩 壺

塩壺は、主として江戸時代に堺を中心とする地方で生産された塩を納め、焼塩として各地に搬出された小形の土製の壺である。近年、京都市内を初め各地でその出土例が報告されている。

本遺跡からは塩壺とその蓋が各々十数点出土している。壺自体、型的に幾つかに分類するし、時期的にもそれぞれかなりの幅に及ぶものようである。これらを壺の器形及びその製作技法からみると、以下の7類に分類できる(第33図)。A) 下から3分の1あたりに最大径があり、口縁に近づくにつれて径を減ずる袋状の器形を呈する。作りは手づくねで、器厚はかなり厚いが、口縁端は尖るように薄く作られている。B) 胴部は筒状を呈し、頸部で僅かにくびれ、口縁が幾分外反する器形で、輪積みによって作られているようである。胴部上半に二重棹の刻印が認められる。文字は2行で上端部を欠いているが、他の遺跡の例からみて『みなと藤左衛門』と考えられる。C) 粘土板を棒状の型に巻いて筒状に作り、底部をあとから埋め込んだいわゆる印籠形のもので、口縁部には蓋受けの段が作られている。胴部に一重棹の『泉湊伊織』の刻印が認められる。D) Cと同様の作り方によるものであるが、やや小形で、蓋受けの段はなく、しかも内外面ともに粘土板の接合部分そのまま残されている雑な作りのものである。E) 器形・技法ともにCに近似したものであるが、内面に粗い布目状の痕跡の認められるものである。F) 最も小形で、型を使って作られたものようで、内面に布目痕が認められるが、他の例と異って底部も共土である。G) ろくろを使用して作られた唯一のタイプで、比較的薄手のものである。

以上の7類についてそれぞれの内容積をみると、Bが最も大きく約9勺、次いでC・E・Gが5勺余り、Dが3勺余り、Aが2.5勺前後、Fは1勺余りと、まちまちであった。蓋も幾つかのタイプが認められるが、壺との対応関係は今のところ明らかでない。

塩壺の時期については、Aがおそらく江戸初頭以前、Bが17世紀後半、C・Dが江戸中葉、E・Gが江戸末ないし明治初頭頃のものとして推定される。

(片岡 肇)

(7) 胞衣壺

胞衣えいなとは本来胎児を包んでいる膜の意であるが、一般的には胎児娩出後に排出される胎盤などいわゆる後産を総称して言うようである。この胞衣を出産後数日中に土中に埋める“胞衣納め”という慣習はかなり古くから認められ、その方法は時代や地方によってさまざまであったようである。胞衣を納める容器としては、古くは桶が用いられたが、江戸時代になると壺を用い、玄関先や床下に埋められることが一般的であったらしい。

本遺跡からもこの胞衣壺が10点余り出土している(第34図)。これらはほとんど同じ器形で、口縁部が幾分立ち気味で肥大し、胴部は丸く張り出し、大きく安定した底部を持つ浅い壺形を呈している。そしてこれに浅い蓋が付く。もちろん素焼きであるが、ろくろによるかなり丁寧な作りである。壺の大きさは少しずつ異なるが、口径12~13cm、胴部最大径15~16cm、底部径13~14cm、器厚6.5~7.5mm、蓋は径15~16cm、高さ1~2cm程度のものである。かなり画一的であることからみて、大量生産され市販されていたものと考えられる。本遺跡では、ロ区及びハ区において、いずれも地表下50cm程度の深さから、数点ずつまとまってほぼ原位置の状態出土しており、完形品が多い。ただ、いずれもユンボで掘削した部分であったので、正確な出土状態や何らかの建物に対する位置関係等は把握できなかった。

これらの正確な時期については明らかではないが、少なくとも曇華院焼失後のものであり、明治39年以降日本銀行京都支店の敷地となってからは、この場所に官舎等を含めて民家の建てられた形跡も認められないことから考えて、幕末ないし明治前葉頃のものとして理解すべきであろうか。器形等は他遺跡出土の江戸時代の例とほとんど変りはないようである。(片岡 肇)



第34図 胞衣壺

(8) 伏見人形

京都市内での発掘調査では、ほとんどの遺跡から伏見人形が出土する。近年はその報告例も多く見られるようになってきた。

伏見人形はその名の示す通り、伏見稲荷大社界隈で作られ、参詣客めあてに売られた土人形である。その起源については諸説があるが、少なくとも16世紀後半には作り始められ、江戸時代初期には商品化され、かなり出廻るようになったようである。伏見人形が最も盛んに作られたのは、文化文政期（19世紀前葉）から明治初頭にかけての頃で、数十軒の人形屋が稲荷大社の門前近くを賑わしたらしい。その後、窯元は減少の一途をたどり、現在では僅か2軒のみとなったものの、今なおその伝統は脈々と伝えられている。

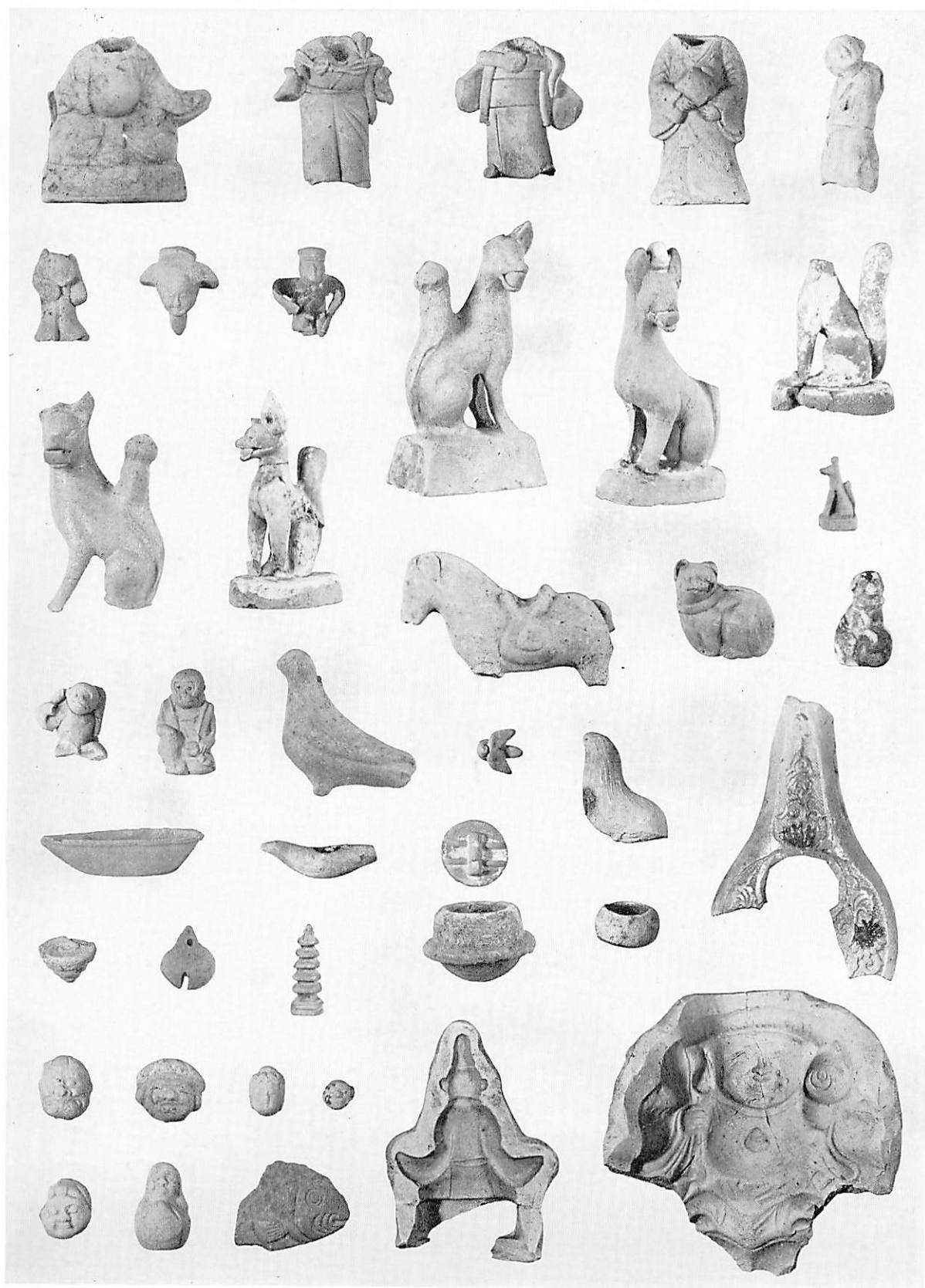
伏見人形は原則的には型抜きによって作られる。従って、その型を作るもとになる“原型”がある。原型はきめの細かい良質の粘土で丁寧に作られ、堅く焼き上げられたもので、代々伝え残されている。この原型から、一般的には表裏2枚の“雌型”と呼ばれる凹型が作られる。雌型は現在では石膏型であるが、以前は土型であり、原型同様これもかなり伝え残されているようである。この雌型の凹面に、良く練られた粘土が指で満遍なく押し込まれる。そして表型と背面型とを合せて、型をはずし、合せ目を箆で調整したり、内側を他の粘土で補強したりして“生地”と呼ばれるものが出来上る。これを数日間かけて十分乾燥させ、窯入れし、800度前後の温度で10時間ほど焼かれる。焼き上がった人形には膠で溶いた胡粉が塗られ、泥絵具で丁寧に彩色されて完成する。こうした製法は、古くから現在に至るまで、ほとんど変りはないようである。完成した伏見人形は稲荷大社の門前で売られたり、各地に送り出されたりして、あるいは信仰の対象として、あるいは玩具として、広く人々の間に親しまれてきた。

本遺跡から出土した伏見人形は、現在なお整理中であり、総点数を確認するに至っていないが、おそらくは千点近くに達するものと思われる。伏見人形は、人形とは言え、人の形ばかりではなく、動物や器物を初め、さまざまなものを含んでおり、その種類は夥しい数にのぼる。

本遺跡から出土した伏見人形についてはまだ詳しく検討していないので、ここでは簡単にⅠ)人物、Ⅱ)動物、Ⅲ)その他の三つに分け、以下に挙げておきたい。

(Ⅰ)人物(第35図) 信仰・縁起物として『天神』・『布袋』、教訓・説話物として『饅頭喰い』・『西行法師』などが見られるが、他の大部分は風俗物に該当しよう。花・槌などさまざまな物を手に持っている者、立っている者、座っている者、兵隊など多様であり、量的にも多い。必ずしも人物に限ったことではないが、小形のものに型抜きではなく、“ひねり”と呼ばれる手づくね手法によって作られたものが多いことが目立つ。また、一部に釉の施された例も認められた。

(Ⅱ)動物(第35図) やはり稲荷信仰との関係か、狐が最も多い。その狐にも、尻尾のみの破片で長さ10数cmに及ぶものから、完形で4cmほどのものまで、大きさもまちまちであり、形も多様である。座位で顔を横に向けた形が一般的であるが、これにも頭上に宝珠を戴せたもの、口に珠や巻物をくわえたもの、尾も長いもの、短いもの、また男根を形造ったものなどが



第35図 伏見人形



第36図 土 面 子

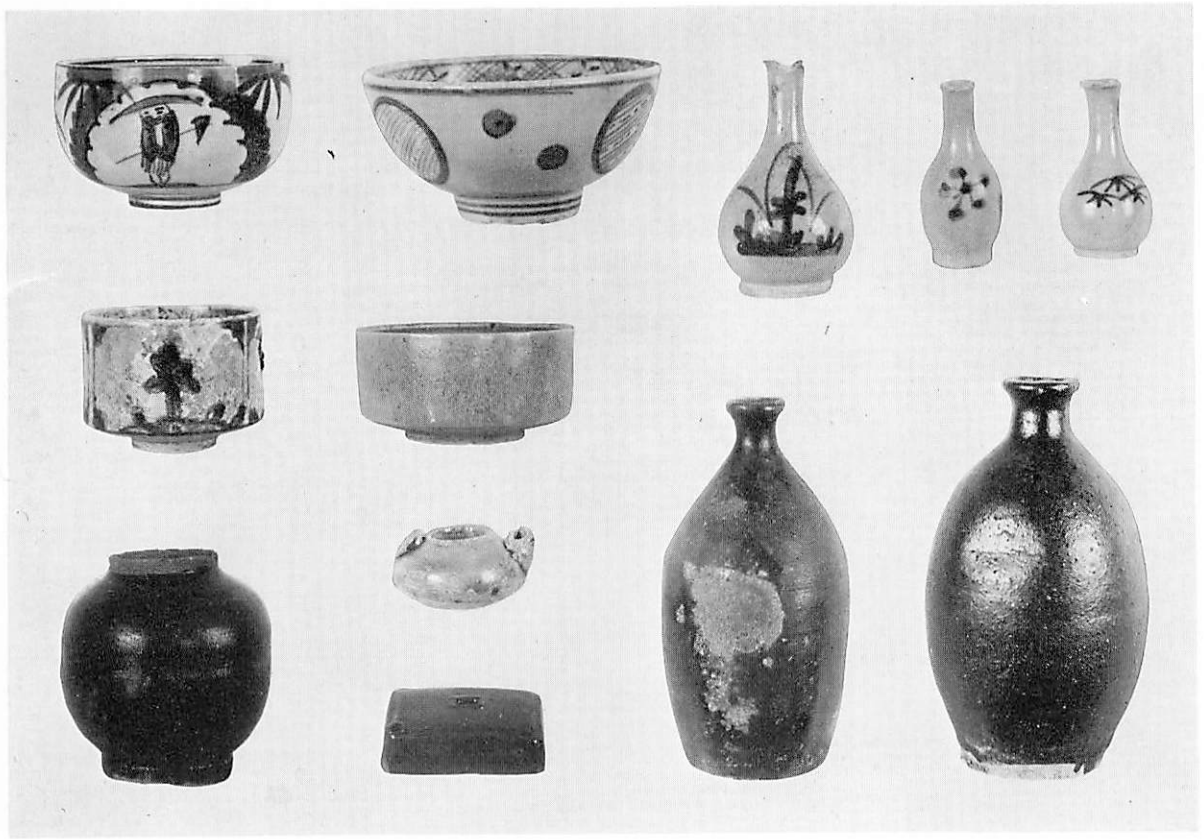
ある。狐のほかには馬・牛・犬・猫・猿・鳩・雀・魚などがあり、その各々にも幾種類かの形が見られる。変わった例としてはオットセイかアザラシと思われる例も認められた。なお、犬のうち『鞠狎』の例には部分的に緑色の釉が施されている。

(III) その他 人物及び動物以外の全てであるが、極めて多様である。土面子・舟・鳩笛・『かまかま』(釜)とその蓋・『つぼつぼ』(壺)・ペイ独楽などの玩具のほか、土蔵・土鈴・釣鐘、さらに『お客明神』と呼ばれるわらい物などがある。特殊なものとしては胡麻煎りが認められた。これは薄い作りで、表面に唐草様の文様が配され、地として黄色い釉が、部分的に緑の釉が施されている。これらのうちで量的に最も多いのは土面子で、100点近くに達する(第36図)。土面子には円盤状のものと、人形の顔や動物の形をしたいわゆる芥子面子とがあり、前者が圧倒的に多い。円盤状のものは直径3cm前後の例が一般的であるが、最小のものは径2.4cm、最大のものが径6cmで、厚さは8~9mmのものが大部分である。文様は、家紋・将棋の駒・十二支を初めとする文字(漢字及び仮名)・人面・動物・わらい物など、その種類は豊富である。

なお、これらの伏見人形の製品に混じて、数点ではあるが、雌型が出土した。完形品は無いが、天神・大黒天・鳩・猿(?)・菩薩像及び土面子などである。いずれも人形よりは精良な粘土で堅く焼上げられたものである。土面子の型などは市販されていたようであるが、他の例については、産地でもないこのような場所から出土することに、幾分奇異な感じを受けている。

本遺跡から出土したこれらの伏見人形の時期については、その出土状況から、一部江戸中期にまで遡るものもあろうが、大半は幕末から明治初頭のものと考えている。中には兵隊を形作ったものなど、明らかに明治以降のものも認められた。

(片岡 肇)



第37図 近世陶磁器

(9) 近世陶磁器

発掘区の全域において、第1層から第3層の一部にかけて満遍なく出土した。目下整理中であるが、出土量が余りに夥しく、未だその全貌を把握するに至っていない。従って図示したのも、これらのうちの完形品の一部から任意に選んだに過ぎない(第37図)。

江戸時代前期まで遡るものも認められるが、量的には少なく、江戸中期以降、とくに江戸後期から明治初頭にかけてのものがその大半を占めるようである。

量的に最も多いのは、伊万里・有田系の磁器類で、なかには若干の青磁も認められる。これらに次いでいわゆる京焼が多く出土しており、さらに丹波焼も少なくない。他に美濃・瀬戸系のもの、唐津、備前、信楽なども若干認められた。それぞれによって器種の違いは見られるようであるが、碗・鉢・皿・猪口・水差・壺・甕・搦鉢・德利・炉明皿など日用雑器がその大半である。茶器・花器の類も少ないながら出土している。

これらの多くの陶磁器類のなかに、一度割れたものを、おそらく膠と思われるもので、接合して再使用した例がかなり認められた。膠は表裏両面に幾分はみ出した状態で接合されており、同じ膠を用いて、唐草状の文様を描いて、その接合箇所が目立たないように工夫したもののさえある。このようにして接合されているのは、碗や皿が多く、使いなれた食器への愛着心がうかがえて興味深い。

(片岡 肇)

5 後 記

このたびの高倉宮・曇華院跡の調査において発見された高倉小路に平行して存在する側溝は、平安後期から鎌倉時代の遺構と考えられ、この時期の高倉小路の西縁の確認ができたものと言える。また、東側石垣の発見は江戸末における高倉小路の位置の確定に役立つものでもある。さらに各種の建築址や石組、石垣は、江戸時代の曇華院が残した遺構と考えられ、先に行われた中京郵便局敷地内の曇華院の調査とあわせて、今後の研究がまたれる。

この発掘を行うにあたっては、財団法人高梨学術奨励基金(理事長高梨仁三郎)より多大なる援助を受けたことをここに銘記し、謝意を表する次第である。

発掘調査および遺物整理は以下の組織で行なった。

調査主体者 平安博物館館長 角田 文衛
調査担当者 平安京調査本部 飯島 武次
調査員 平安博物館考古学第一研究室
片岡 肇
平安博物館考古学第三研究室
寺島 孝一

また発掘調査の期間中には館内外の多くの方々の積極的な協力があつた。御氏名を銘記して感謝の意を表したい。

調査補助員 芝野康之・小栗栖健治・古川良一・中西靖(以上大谷大学)
浜田由美子・松崎剛博(以上竜谷大学)
渡辺博人(駒沢大学)
整理参加者 渡辺美栄子・角高裕子・村山ちぐさ・片山淳子・植松なおみ・新居和昭・(故)菅井彰夫

平安京高倉宮・曇華院跡の発掘調査

発行日 昭和54年3月31日
編集者 財団法人古代学協会
(飯島武次)
発行者 財団法人古代学協会
604 京都市中京区
三条大路北高倉小路西
振替 京都 850番
TEL 075 (222) 0888
制作 ビクトリー社
604 京都市中京区
油小路通錦上る